福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI
REPOSITORY

W. C. バーンズと漢訳『天路歴程』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 崇弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/1415

W. C. バーンズと漢訳『天路歴程』について

永井　崇弘

は　じ　め　に

バニヤンの*Pilgrim's Progress*は聖書の次に翻訳される著作であるとされてきたが、中国においては1853年になってようやくその全漢訳が完成した。それは英国人宣教師W. C. バーンズの手によるもので、彼による「天路歴程」という訳語は現在にいたるまで使われ続けている。

プロテスタントによる中国伝道は1807年に渡華したR. モリソンにはじまる。それ以来、欧米人宣教師が陸続と渡華し伝道活動に従事する。特に、1842年の南京条約によって伝道できる地域が拡大すると、中国伝道に携わる宣教師の数は急速に増加した。しかしながら、バーンズまで*Pilgrim's Progress*の全漢訳が行われることはなかった。中国における直接伝道は、特に1858年の天津条約や1860年の北京条約以前までは非常な困難に直面していた。そして多くの宣教師が聖書の漢訳や中国語の研究、教育事業、社会事業などの間接伝道へその軸を移していった。しかし、バーンズはその生涯を直接伝道に捧げた。

本稿では*Pilgrim's Progress*の原著者である17世紀のバニヤンを出発点とし、その信仰がどのようにして19世紀のバーンズに継承され、*Pilgrim's Progress*から『天路歴程』を成立させたのかを明らかにする。また、バーンズ訳の書誌的考察や2種の版本比較を行い、その訳語の相違点や特徴も考察する。

1．バニヤンの信仰と*Pilgrim's Progress*

『天路歴程』の原著者であるバニヤン（John Bunyan：1628-1688）はイングランド中部の街、ベッドフォード（Bedford）近郊のエルストウ（Elstow）に生まれた。バニヤンの家は鋳掛屋を営み、両親ともイングランド国教会に教会籍を置いていた[1)]。

イングランドにおける宗教改革は、16世紀のヘンリー８世の離婚・結婚問題が直接の起因であるが、1525年-1530年のティンダル（William Tindale）による英訳聖書、1535年のカヴァーデイル（Miles Coverdale）による英訳旧新約聖書に代表されるオックスフォード改革派の働きやルターの著書の流布など、改革の機運が醸成されていた。このような情勢のもと、1539年には「六箇条」

が公布され、イングランド国王を教会の最高首長とするイングランド国教会が成立した。教会組織としてはローマ・カトリック教会から離脱したイングランド国教会であるが、教義についてはローマ・カトリックを継承していた。その後、1549年の「礼拝統一法」、1552年の『祈祷書』、『四十二箇条』、1559年の「礼拝統一法」、1563年の『三十九箇条』などによって教義のプロテスタント化、カルヴァン主義化が推し進められた。さらに1567年には、イングランド国教会の更なる改革を主張した清教徒が大きな勢力となり、清教運動が拡大していった[2]。彼らは、信仰と生活の基を聖書に置き、国教会の「清め」を主張したため「清教徒（Puritan）」と称された。この清教運動により、国教会内の分派としてカートライト（Thomas Cartwright）の長老派、ジェイコブ（Henry Jacob）の会衆（独立教会）派などが生まれた。ジェイコブは1616年にオランダから英国に戻り、ロンドンで非国教主義準分離派の教会を立ち上げた。カルヴァン主義バプテスト派であるパティキュラー・バプテスト（Particular Baptists）[3] は、このジェイコブ教会から形成される。

バニヤンの信仰生活における大きな転機は、1653年ジョン・ギフォード（John Gifford）により再浸礼が授けられ、ベッドフォードのバプテスト教会の教会員となる頃にある。ギフォードとその後継者であるジョン・バートン（John Burton）は、パティキュラー・バプテストのなかでも穏健派に属していた[4]。バプテスト派はその名称から信仰者のバプテスマ（浸礼）が強調されがちである。しかし、1644年の「第一ロンドン信仰告白」[5] 全53箇条において、39箇条と40箇条にようやく信仰者のバプテスマについての記載が見られる。つまり、バプテスト派の特徴は信仰者のバプテスマと言うよりも、その基礎となる聖書により忠実な聖書主義にあると言える。この聖書主義を土台として、新約聖書にある信仰および信仰者の集まりである教会の確立をめざした結果、浸礼による信仰者のバプテスマや会衆制、万人祭司などのバプテスト派の諸特徴が他諸派との比較によって現れているにすぎないのである。

このようなバプテスト派の聖書主義がバンヤンの信仰と一致し、再浸礼を受けてバプテスト教会の教会員へと導かれたのである。それは「バンヤンの霊的病いの中には聖書をそのまま神の言葉と取る極端なプロテスタント的観念がつきまとっている。」[6] と述べられていることとも一致する。

このような聖書主義を背景に、バンヤンは神の導きを確信しつつ秘密集会で説教を行い、1656年にはついに公に説教活動を始めた。彼は学術的神学者としてではなく、職人説教者、俗人説教者としての道を歩んだ。バンヤンは1660年と1677年の2度投獄されるが、一度目の投獄は王政が回復して非国教徒への弾圧が始まり、無許可で説教を行ったことによるものであった。チャールズ２世の「信仰自由宣言」により非国教徒の信仰の自由が認められた1672年に釈放されるが、その獄中生活は12年にも及んだ。二度目の投獄は1677年でその期間は半年ほどであった。

バンヤンの*Pilgrim's Progress*は、二度目の釈放後の1677年12月23日に書籍出版業組合の登録簿に記載され、1678年2月に出版の認可が下りている[7]。1678年に初版が出版されると、1年も経たずに第2版が出版されるほど多くの人々に受け入れられた。この*Pilgrim's Progress*はバニヤンの精

神的自叙伝とも言われるが、その特徴は聖書のことばを用いて、聖書の比喩を用いて、聖書の信仰を語るところにある。また、*Pilgrim's Progress*の最初の箇所には次のように記されている。

I dreamed, and behold I saw a man clothed with rags, standing in a certain place, with his face from his own house, a book in his hand, and a great burden upon his back.[8)]

ここで男の持っている本とは聖書を指すのであるが、新約聖書にある使徒のように神のことばのみを携えて天国へ向けて巡礼を行うという神学観が示されている。このことからも聖書のことばを語るという聖書に根ざしたバニヤンの信仰を確認することができる。

2．バーンズとその信仰

バニヤンの*Pilgrim's Progress*を初めて『天路歴程』として全漢訳したのは、英国人宣教師のW.C.バーンズ（William Chalmers Burns：1815-1868）である。彼の中文名は賓威兼。1815年、聖職者家庭の3番目の息子としてスコットランドのキルシス（Kilsyth）に生まれる。敬虔な家庭で育ち両親は聖職者になることを期待したが、16歳のときエジンバラの法廷外弁護士で叔父のアレキサンダー・バーンズ（Alexander Burns）のもとで見習いとなり、法律業を志す。しかし、その後しばらくして聖職者を志して、アバディーンのMarischal Collegeとグラスゴー大学で神学を修めた。グラスゴー大学で学んでいる間も大学の宣教団体の会員となって活動し、1837年の冬に海外宣教の召しが与えられた。1839年3月27日にはグラスゴーにおいて説教をする許可を得た。

この間にもバーンズのなかに信仰復興運動への覚醒が醸成されていた。そして、1839年7月23日にその明確な転機が彼の故郷キルシスで訪れ、彼の説教と伝道に大きな力が加わった。

バーンズは説教の許可を得た1839年からキルシスをはじめ、ダンディー（Dundee）、パース（Perth）、また1840年にはアバディーン（Aberdeen）で、1841年から1844年にかけてはニューキャッスル（Newcastle）、エジンバラ（Edinburgh）、ダブリン（Dublin）で説教、伝道活動を行った。さらに1844年から1846年にかけてはカナダでも福音を宣べ伝えた。バーンズもバニヤンと同じように説教、伝道に生きた人物であった。

1843年、牧師任命権の擁護をめぐってスコットランド教会に「分裂」（Disruption）が起こった[9)]。そして、チャルマーズ（Thomas Chalmers：1780-1847）が、国教会の牧師474名[10)]とともに離脱しスコットランド自由教会（Free Church of Scotland）を設立するが、このときにバーンズも自由教会に加わった。この後、スコットランド自由教会は、積極的な福音主義的伝道的団体となっていった[11)]。

19世紀に起こった信仰復興運動は、スコットランドにおいても教会の分裂をもたらしたが、それはルターの宗教改革や英国における宗教改革にも見えるように、聖書という原点に立ち返るために通ってきた道でもある。またその敬虔さの回復は、「それゆえ、あなたがたは行って、あら

ゆる国の人々を弟子としなさい。」[12] という聖書のことばを忠実に実践し、国外への福音伝道活動を活発に行うこととなる。

バーンズはカナダから1846年9月15日にグラスゴーに戻ると、スコットランド自由教会の宣教師としてインドへ行く申請の更新をする。しかし、自由教会には基金の状態が宣教拡大を許さず空席がなかった。ちょうどこの時、イングランド長老会（Presbyterian Church of England）宣教委員会のハミルトン（James Hamilton）は、スコットランドでイングランド長老会が派遣する最初の中国への宣教師を求めていた。

イングランド長老会は、1836年にスコットランド教会との協議を経て独立するが、正式に独立が宣言されたのは1844年のことであった。それとともに、国内および国外宣教の開始も決定されていた。イングランド長老会の独立初期は、海外宣教の献金がスコットランド教会へ送られていたほど親密な関係にあった。

バーンズはイングランド長老会の求めに応じて、1847年6月初旬にメアリー・バナタイン（Mary Bannatyne）号で英国を離れ中国へと向かった。そして、五ヵ月余りを経た1847年11月、香港に到着した。1851年6月に香港を離れ、8月にはヤング（James Young）とともに*Pilgrim's Progress*を漢訳することとなる厦門（1851-1854）に渡り伝道活動を開始する。その後、上海や汕頭（1855-1858）、北京や牛荘（1863-1868）など内陸部を含む中国各地へ巡回伝道を行うが、1868年4月4日に奉天府牛荘で病により召天した。

3．中国伝道と漢訳『天路歴程』の成立

プロテスタント宣教師による中国伝道は、1807年のロンドン伝道会派遣宣教師モリソン（Robert Morrison：1782-1834）に始まり、アヘン戦争によって南京条約が締結された翌年の1843年には12のプロテスタント伝道団体が中国で伝道活動を行っていた[13]。しかし、バーンズの前に*Pilgrim's Progress*を全漢訳して出版されることはなかった。バーンズが*Pilgrim's Progress*の漢訳に着手したのは、1852年6月1日で、漢訳の完成は1853年3月10日である。バニヤンの原著が出版されて175年後、モリソンの旧新約聖書が完成して30年後のことである。バニヤンの*Pilgrim's Progress*は、聖書の次に翻訳される著作である言われているが、中国においては30年もの歳月を要した。

バーンズ以前の宣教師は、聖書の漢訳をはじめとする伝道・神学書の漢訳、著作だけでなく、英華字典や中国語文法書などの語学書や直接伝道とは関係しない科学技術や西洋文化などに関する漢訳と著述も行ってきた。語学関係の著作については、聖書の漢訳や伝道文書の作成に必要な基礎的研究とも言えるが、彼らは中国において宣教師であるとともに言語学や人類学などの研究者でもあった。モリソンは『神道論贖救世総説真本』（1811）をはじめとし、『英華字典』（1815-1823）、『通用漢言之法』（1815）、『神天聖書』（1823）など漢訳聖書を含む30種をこえる大きな、また多くの業績を残した。しかし、プロテスタントによる中国伝道の最早期では直接伝道は困難

を極め、モリソンには多くの業績が与えられたが、最初の信徒が与えられるまでに7年もの歳月が費やされた[14]。

また、『天道溯原』で知られる米国人宣教師マーティン（William Alexander Parsons Martin：1827-1916）は、米国長老会外国伝道局（Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America）より中国に派遣され、バーンズとほぼ同時期の1850年に香港へ到着し、寧波で活動した。マーティンは、寧波に到着後は直接伝道にも従事していたようであるが、1862年以降は中国人集会者が少なく、直接伝道から教育活動や著作活動へと中国での活動を変化させていったようである[15]。1862年に活動の大きな転機を迎えた言われるマーティンだが、彼の最初の著作が宗教書ではなく、1852年に出版された寧波方言の地理教科書『Di-li shü lin van-koh kwu-kying z-t ‘i yiu-tin kông-tsing』であることは示唆に富んでいる。マーティンの宣教師としての活動は66年にわたり[16]、1914年の最後の刊行物までに48種の業績を残した[17]。そのうち、宗教書は19種で、伝道の基礎となる語学書 3 種を含めても、科学技術や西洋文化という非宗教書の26種という数を超えることはなかった。

一方、バーンズの著作は賛美歌集である『神詩合選』、『潮腔神詩』（1861）、『榕腔神詩』（1861）、『厦腔神詩』（1862）と宗教小説である『天路歴程』（1853）、第2部を含む『官話天路歴程』（1865）、さらに宗教書である『正道啓蒙』（1864）、ヘブライ語からの漢訳『詩篇』（1867）の8種にすぎない[18]。

このように、バーンズは多くの学問を修めたにも関わらず、中国についての研究、科学技術や西洋文化の紹介といった業績はない。彼が残した8つの業績は全て伝道文書であることからも、彼が中国においても最後まで直接伝道で神に仕えようとしたことが分かる。それに対して神は厦門到着後3年を経た1854年に多くの伝道の実を彼に与えた。バーンズは厦門から離れた白水営でも伝道を行い多くの中国人を神のもとに導いたが、彼はこれらの信徒を米国宣教師に委ねて更なる開拓伝道を行った。そして当時、強いキリスト教に対する迫害にも関わらず、石碼でも会堂を設立した[19]。

バーンズの直接伝道の熱心さと忠実さについては、1855年から7ヶ月間、ともに内陸部において伝道活動を行った中国内地会（China Inland Mission）の英国人宣教師ハドソン・テーラー(Hudson Taylor）もバーンズとの働きを「使徒行伝」のパウロとテモテのように譬えたり、バーンズとの活動で得たものは大学での学び以上であったなどと述べたりしていることからも分かる[20]。ハドソン・テーラーも中国研究者、学術的神学者としてよりも、中国伝道者としてその名を馳せているように、バーンズも伝道者としてその名が知られている。バーンズはハドソン・テーラーに倣い、中国の服を着用して街角に立って福音を宣べ伝えた[21]。

このような伝道に対する姿勢は、弁証法、合理的思考法を用いた伝道を考えていたマーティンとは大きく異なる。バーンズは『天路歴程』の基督者のように、また新約聖書の使徒のように多くを持たず、信仰と聖書のことばを携えて中国の地で伝道を行った。このような信仰復興運動の影響を受けた強い信仰と直接伝道という志を背景として、漢訳『天路歴程』が誕生したのである。

またこの*Pilgrim's Progress*は、彼が幼少のころ何度も読んだ2冊の愛読書の1つでもあった[22]。そして、彼の「天路歴程」という訳語は現在に至るまで、その地位を不動のものとしている[23]。

4．バーンズ訳『天路歴程』の版本について

バーンズ訳『天路歴程』は文言により漢訳された。1852年6月1日に漢訳が始められ、1853年3月10日にその翻訳が完成した[24]。このように*Pilgrim's Progress*の最初の全漢訳はバーンズによって成し遂げられたが、部分訳としては彼以前に存在していた。彼は1851年に、児童用としてロンドン伝道会（London Missionary Society）のミュアヘッド（William Muirhead）が上海で出した部分訳を入手しているので、参照している可能性は大きい[25]。

訳稿は、米国改革派教会（Dutch reformed Church in America）のドティー（Elihu Doty）とロンドン伝道会のストロナッチ（Alexander Stronach）が彼らの中国人教師とともに目を通している[26]。

バーンズ訳『天路歴程』は1853年に厦門で初版（全5巻99葉）、1855年に香港で重版（66葉）されている。また1856年には香港で序文と挿絵が付いて重版、同年上海でもミルンの付録が付けられ重版されている。1857年には福州で重版されているが、この福州本は米国メソジストによるもので、「God」と「Spirit」の訳語が異なっている。1862年には1856年の上海本が付録なしで重版（全63葉）され、また同年「中外雑誌」にも掲載された。1863年には新版が香港で出版されている。1865年には1863年の香港本が上海で重版（全55葉）され、それは米国長老会によるもので、欄外に聖書箇所を付記し、「God」と「Spirit」の訳語が変更されている。1869年には美華書館より欄外に聖書箇所が付記され、「God」と「Spirit」の訳語が変更されて出版された（全51葉全5巻）[27]。1872年にも上海で出版され、1883年には小書会真宝堂の重刻本が出ている。バーンズ訳『天路歴程』の官話訳は彼の手により、1865年に第2部とともに北京にて完成している。また、バーンズ訳をもとにして、1871年には羊城恵師礼堂より広東語訳本である『天路歴程土話』が出版されている[28]。

このように、多くの版を重ねたバーンズ訳であるが、原訳本と改訂本の 2 種の版本の存在が確認できる。ここでは、原訳の重刻である小書会真宝堂本（『天路歴程』小書会真宝堂　1883）と改訂訳である美華書館本（『天路歴程』蘇松上海美華書館　1869）を比較し、その改訂箇所の考察を行う。

小書会真宝堂本は24.8cm × 13.5cm、序1葉、本文は全5巻で103葉。挿絵は「指示窄門」、「救出泥中」、「将入窄門」、「灑掃塵埃」、「脱下罪任」、「喚醒痴人」、「上艱難山」、「美宮進歩」、「身披甲冑」、「戦勝魔王」、「陰翳祈祷」、「覇伯老王」、「拒絶淫婦」、「摩西執法」、「唇徒騁論」、「復遇伝道」、「市中受辱」、「尽忠受死」、「初遇美徒」、「招進財山」、「同観塩柱」、「牽入疑寨」、「脱出疑寨」、「同遊楽山」、「小信被劫」、「裂網救出」、「勿睡迷地」、「娶地暢懐」、「過無橋河」、「将入天城」の30葉で、本文にそれぞれ挿み込まれている。その絵は風景、建物、人物、服装などすべて中国化されている。1853年の初版本にもスコットランド人画家のアダムス（Mr. Adams）による中国化

された挿絵が付されていたようであるが[29]、それと同一のものかは不明である。しかし、1871年に羊城恵師礼堂より刊行された広東語訳本『天路歴程土話』にある挿絵はすべて小書会真宝堂本と一致している。さらに扉には「主降一千八百八十三年重刻」、「天路歴程」、「光緒九年」、「小書会真宝堂蔵板」の記載がある。

一方、改訂訳である美華書館本は、19.5cm × 11.9cm、序2葉、本文は全5巻で49葉。扉には、「耶穌降世一千八百六十九年」、「新鋳銅版」、「天路歴程」、「同治八年」、「蘇松上海美華書館蔵板」と記されている。挿絵は「始就天路図」、「入窄門図」、「脱罪任図」、「入美宮図」、「過邪教穴図」、「死守真道図」、「脱疑牢図」、「遥望天城図」、「渉死河図」、「進天城図」の10枚である。絵の描写は細かいが、風景や服装などは中国と西洋が入り混じったものとなっている。上海が開港した1843年に26人であった上海の外国人登録者は1860年には600人を超え、1865年には2,000人を超えていた[30]。美華書館本が刊行された 4 年後の1869年にはさらに多くの外国人が居住し、それによって西洋の文化が身近なものとなり、全てを中国化する必要がなくなったからかもしれない。この10枚の挿絵なかでも「入窄門図」(「将入窄門」)、「脱罪任図」(「脱下罪任」)、「入美宮図」(「美宮進歩」)、「過邪教穴図」(「覇伯老王」)、「死守真道図」(「尽忠受死」)、「脱疑牢図」(「脱出疑寨」)、「渉死河図」(「過無橋河」)、「進天城図」(「将入天城」) の構図は小書会真宝堂本のものと非常に似ている。

小書会真宝堂本と美華書館本の異同箇所は、序を含めて全484箇所である。これらの異同の特徴は、大きく2つの類型に分けることができる。一つは、挿絵の付加による序の改訂、誤字の訂正、文意を通じ易くするための文字の増減や同義語（非神学用語）の交換を主とするものである[31]。なお、(　) 内は該当箇所の葉数と行数を示し、下線は論者による。

文字の増減

時基督徒憂鬱泥中（5：6）　⇒　時基督徒在憂鬱泥中（3：11）

妄自恃己功（47：1）　⇒　而妄自恃己功（22：32）

外亦有之（27：15）　⇒　有之（14：14）

時遂親来（56：2）　⇒　遂親来（26：27）

同義語の交換

若扣其門（13：11）　⇒　若叩其門（7：12）

爾見一女以水洒地（14：17）　⇒　汝見一女以水洒地（7：29）

無奈所負之任重（5：7）　⇒　無奈所負之重任（3：11）

誤字の訂正

信質（31：8）　⇒　信盾（15：31）（shieldの訳語）

有一少山（65：12）　⇒　有一小山（31：11）

文構造の改訂
所用驢之牙骨（31：13）　⇒　所用之驢牙骨（16：2）
我行未出（82：10）　⇒　我未行出（39：18）

この類型では、文字の増減および同文字数の同義語の交換がほとんどを占め、誤字の訂正や文構造の改訂の箇所はそれほど多くは確認できない。文構造を大きく、また多量に改訂することは、バーンズ訳の改訂ではなく新訳の成立につながり、それには多くの労力を費やすことが必要となる。

もう一つの異同箇所の特徴は、GodとSpiritに類する訳語の改訂である。これが小書会真宝堂（原訳）本と美華書館（改訂訳）本の違いの大きな特徴となっている。これは、ワイリーによっても示されている[32]。小書会真宝堂（原訳）本はGodとSpiritの訳語に「上帝」および「聖神」を充て、美華書館（改訂訳）本は「真神」と「聖霊」を採用している。この相違は、漢訳聖書の用語論争（Term Question）に関連しており、英国系は「上帝」と「聖神」を採用し、米国系は「神」（「真神」）と「聖霊」を採用している[33]。美華書館は米国長老会の印刷所であるから、「真神」と「聖霊」を採用した改訂訳本を出版しているのは理解できる[34]。

小書会真宝堂本の「聖神」、「神」は、美華書館本では「聖霊」、「霊」となり、「神」が「霊」に置き換えられている。「聖神」は8箇所、「神」は3箇所確認できる。なお、（　）内は該当箇所の葉数と行数を示し、下線は論者による。

我乃役使之神（100：10）　⇒　我乃役使之霊（47：29）
又有義人之神（100：16）　⇒　又有義人之霊（48：2）
将其所有及其身神或典或売（80：6）　⇒　将其所有及其身霊或典或売（38：21）

これらの「聖神」（聖霊）と「神」（霊）の違い、つまり単音節語か二音節語かの違いは、漢訳の修辞法によるものであると考えられる。一方、小書会真宝堂本の「上帝」に対する訳語は、「福音」、「真神」、「主宰」、「耶和華」がそれぞれ充てられている。このうち、「真神」が最多で172箇所、次に「主宰」が16箇所、「耶和華」と「福音」がそれぞれ2箇所ずつとなっている。このなかで、「福音」は序の「因伝福音真道」（「因伝上帝真道」）と「且教人如何信福音道理」（「且教人如何信上帝道」）に使用されているだけで、本文には「福音」の訳語は見られない。

つまり、本文にある「上帝」に対する訳語は「真神」、「主宰」、「耶和華」であり、Godの訳語として通常型の「真神」、個人的あるいは非公式型の「主宰」、厳格あるいは公式型の「耶和華」がそれぞれ使い分けられている。また、小書会真宝堂本の「悪神」（enemies）は、美華書館本で

は「悪鬼」が充てられており、敵であるサタンに「神」の字が使用されていないことからも、美華書館本の訳語への細やかな配慮が確認できる[35]。

お わ り に

1807年に渡華したモリソンをはじめとするプロテスタント宣教師の伝道活動は、主に2つの類型がある。1つは直接伝道を中心とした働きで、もう1つは直接伝道を願いながらも研究事業、教育事業、社会事業などの活動に中心を移した間接伝道の働きである。漢訳『天路歴程』を完成させたバーンズは、スコットランドにおいて信仰復興運動の影響を受け、中国において極めて伝道が困難な時期にあっても、その生涯にわたり直接伝道で神に仕えた。彼が残したそれほど多くない業績は、『天路歴程』や賛美歌など直接伝道に必要な伝道文書ばかりであった。

このようなバーンズの信仰やそれを礎とする伝道に対する姿勢は、17世紀のバニヤンの信仰と重なる。バニヤンの聖書に忠実な信仰が*Pilgrim's Progress*を生み出したように、バーンズの信仰が『天路歴程』を完成させたのである。その聖書に忠実な信仰は、宗教改革から清教運動、イングランドの非国教主義を経てバニヤン（バプテスト）に継承され、さらに信仰復興運動によりバーンズに受け継がれていった。

聖書に根ざした信仰を継承したバーンズが完成させた漢訳『天路歴程』は、彼の召天後も版を重ね続けた。そのバーンズ訳には原訳と改訂訳の2種類の版本が存在していることを確認した。そして、原訳の1つである小書会真宝堂本と改訂訳の1つである美華書館本を比較すると、その相違部分が（1）序の改訂、誤字の訂正、文意を通じやすくするための文字の増減や同義語の交換、文構造の改訂と（2）GodとSpiritに類する訳語の違いにあり、後者はそれが漢訳聖書と同じように用語論争の影響によることも分かった。原訳者であるバーンズは英国人宣教師であるので「上帝」と「聖神」の訳語を採用し、改訂訳は米国の印刷所である美華書館によるものであるため「真神」と「聖霊」が採用されていた。また、原訳の「上帝」に対する訳語が、改訂訳では通常型の「真神」、個人的あるいは非公式型の「主宰」、厳格あるいは公式型の「耶和華」にそれぞれ使い分けられていることも確認することができた。

注

1）ロジャー・シャロック『ジョン・バニヤン』（バニヤン研究会訳　ヨルダン社　1997）4頁

2）Earle E. Cairns『基督教全史』（聖書図書刊行会　1957）447頁

3）イングランド宗教改革によって誕生したバプテスト派には、キリストによる贖罪対象の神学観の異なりから、ジェネラル・バプテストとパティキュラー・バプテストがそれぞれ成立する。前者はアルミニウス主義神学に立ちキリストの贖罪の普遍性（General）を主張するが、後者はカルヴァン主義神学に立ちキリストの贖罪の特定性（Particular）を主張し、それは神に選ばれた特定の者にのみ与えられるとする。

4）ロジャー・シャロック『ジョン・バニヤン』（バニヤン研究会訳　ヨルダン社　1997）37頁
5）斉藤剛毅『資料　バプテストの信仰告白　改訂版』（ヨルダン社　2000）413頁
6）ロジャー・シャロック『ジョン・バニヤン』（バニヤン研究会訳　ヨルダン社　1997）88頁
7）同上　95頁
8）John Bunyan, R. Southey. 1830. The *Pilgrim's Progress* with A life of John Bunyan. John Murray 11頁
9）スコットランド教会は1690年に長老派教会がスコットランドの国教となり、ウェストミンスター信仰告白が正統な教義となる。しかし、1707年に英国とスコットランドの連合が成立。1712年には英国議会の法律によりスコットランドでも主教制が認められたが、この主教制はこれまでの代表制の長老主義とは相容れないものであった。この後、1847年に至るまで、会衆自身による牧師任命権の擁護をめぐり分裂と合同を繰り返すこととなる。
10）Earle E. Cairns『基督教全史』（聖書図書刊行会　1957）544頁
11）同上
12）「マタイによる福音書」第28章19節
13）Missionary Chronicle No.61（Methodist New Connexion 1879.1.）　268頁
14）1814年に蔡高がマカオにて洗礼を受けている。
15）吉田寅『中国キリスト教伝道文書の研究』（汲古書院　1993）94頁
16）但し、マーティンは1860年から1862年にかけて米国へ一時帰国している。
17）吉田寅『中国キリスト教伝道文書の研究』（汲古書院　1993）95-96頁を参照。
18）Alexander Wylie. 1867. *Memorials of protestant missionaries to the Chinese*. American Presbyterian Mission Press. Reprint 1967 Ch'eng Wen Publishing Company. Taipei 175-176頁およびIslay Burns. 1873. *Memoir of the Rev. W. C. Burns, M. A*. 330頁を参照。
19）山口昇『欧米人の支那に於ける文化事業』（日本堂書店　1921）280頁
20）Howard Taylor. 1935. *Hudson Taylor's Spiritual Secret*. China Inland Mission　50頁
21）同上　51-52頁
22）Islay Burns. 1873. *Memoir of the Rev. W. C. Burns, M. A*.　9頁
23）その他、*Pilgrim's Progress*の訳語にはCobboldの「旅人入勝」（1855）などがある。
24）Islay Burns. 1873. *Memoir of the Rev. W. C. Burns, M. A*.　256頁
25）同上
26）同上
27）Alexander Wylie. 1867. *Memorials of protestant missionaries to the Chinese*. American Presbyterian Mission Press. Reprint 1967 Ch'eng Wen Publishing Company. Taipei 175-176頁および熊月之『西学東漸与晩清社会』（上海人民出版社　1995）150頁、163頁、 Robert Kennaway Douglas. 1877. *Catalogue of Chinese Printed Books, Manuscripts and Drawings in the*

Library of the British Museum. Reprint 1987 『大英博物館所蔵漢籍目録』（科学書院）6頁、Robert Kennaway Douglas. 1903. *Supplementary Catalogue of Chinese Books and Manuscripts in the Library of the British Museum*. Reprint 1987 『大英博物館所蔵漢籍目録・補遺篇』（科学書院）6頁を参照。

28）この版本は、第2部（『続天路歴程土話』羊城恵師堂 1870）も存在することや第1部（『天路歴程土話』羊城恵師堂 1871）の序文により、官話訳本からの訳出されたものであると思われる。

29）Islay Burns. 1873. *Memoir of the Rev. W. C. Burns, M. A.* 256-257頁

30）熊月之『上海的外国人』（上海古籍出版社 2003）1頁

31）平易化の類型については、永井崇弘「浅文理にみる平易化の特徴について」（『関西大学中国文学会紀要26号』関西大学中国文学会 2005）93-106頁を参照。

32）Alexander Wylie. 1867. *Memorials of protestant missionaries to the Chinese*. American Presbyterian Mission Press. Reprint 1967 Ch'eng Wen Publishing Company. Taipei 175-176頁を参照。

33）「God」と「Spirit」の訳語について、プロテスタントでは1843年に代表訳の漢訳が決定されたところから論争が開始される。米国バプテスト会はバプテスマの訳語問題で最初に離脱するが、「God」と「Spirit」の訳語をめぐり、米国系のブリッジマンとカルバートソンなどは「神」・「聖霊」の採用を主張してブリッジマン・カルバートソン訳聖書を完成させる。一方、英国系、特にロンドン伝道会のメドハースト、ミルンなどは1851年に離脱し、「上帝」・「聖神」の採用を主張して代表訳聖書を完成させる。現在に至るまで、漢訳聖書は神版と上帝版の2種の版が存在している。

34）但し、美華書館は例外なしに「神」・「聖霊」のみを出しているわけではない。そのほとんどが「神」・「聖霊」版であるが、『天道溯原』（上海美華書館代 1899）や『安楽家』（上海美華書館排印 1911）、『福音合参十版』（上海美華書館排印 1910）など「上帝」版も存在する。

35）*Pilgrim's Progress*では聖句の引用が多用されているが、美華書館本では聖書の聖句と異なる訳語が充てられているものもある。詩篇65篇9節からの引用で、小書会真宝堂本では「為上帝之河」（68：7）とあるが、美華書館本では「為耶和華之河」（32：17）となっている。この箇所はブリッジマン・カルバートソン訳（『旧約全書』大美国聖経会託印 蘇松上海美華書館蔵板 1880）では「神之河盈於水」となっており、「耶和華」ではなく「神」が使用されている。